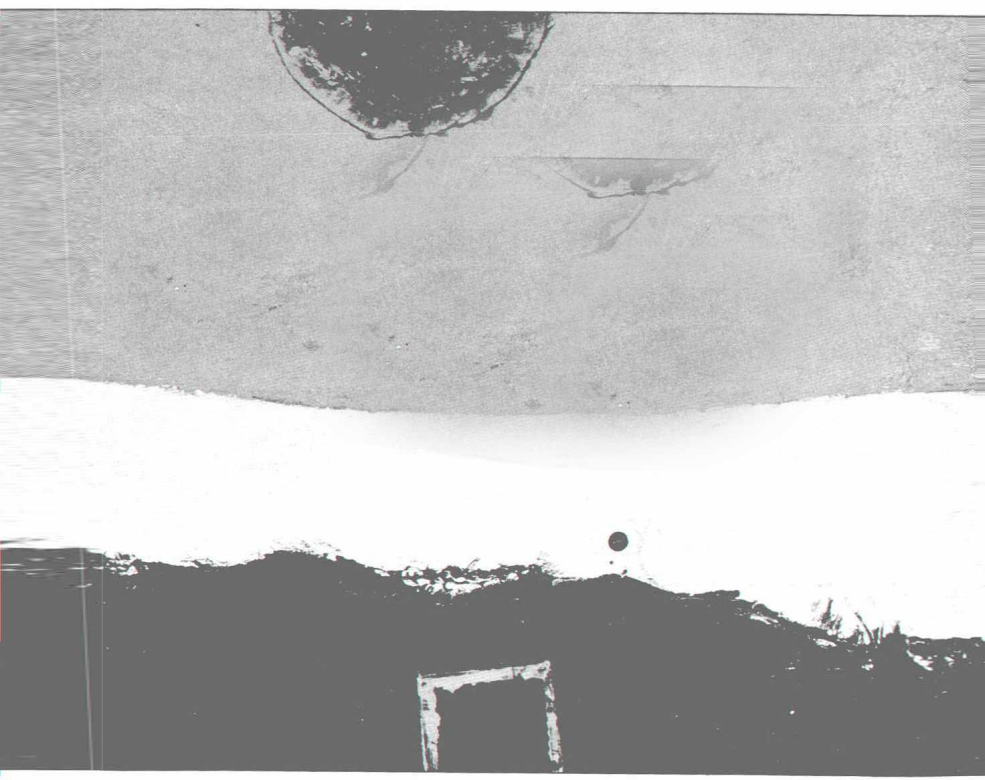
# 木村春作
# さらば国境よ



**著者略歴**

1922年1月新潟市生まれ。東京外国語学校卒業。戦後、上海より復員。現在、カシマ工機株式会社に勤務、傍ら創作活動に励み「さらば国境よ」で集英社懸賞小説佳作に入選。

**さらば国境よ**

一九七九年三月　十　日　初版印刷
一九七九年三月二十五日　初版発行

定　価　七八〇円

著　者　木村春作

発行者　堀内末男

発行所　株式会社集英社
東京都千代田区一ツ橋二の五の十
郵便番号　一〇一
電話　出版部　(03)三三〇—六三六一
　　販売部　(03)三八一—三六二一

印刷所　大日本印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本はお取り替えいたします。

© 1979 S. KIMURA

0093-772188-3041 Printed in Japan

# 目

# 次

プロローグ　7
秘仏　11
鬼子母神　40
千枚通し　60
ジャコシカ　84
ブロマイドとメキシコオパール　123

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

海豹島　154
さらば国境よ　187
エノキの古巣から　224
エピローグ　247

装丁　アトリエ・バウ

# さらば国境よ

# プロローグ

——やろ、まだ、ここだてば。
——えっ、いたか。
——大助どんの子分に知らせろか。
——いや、もうしんべねえ。死んでるがな。
——んだ、耳血がこんけい出てるもの。
——あっ、こら、さわんなてば。巡査さんがこらっしゃるまで。
——医者どん呼ぶのが、先でねの。検死役は、そうと決まってんだもの。
——なあに、放置すておけ、こんげ親不孝もん。
——さんざ、ごろついて来て、今さら兄ちゃだなんて、ね。
——ええ気味だわ。
——女ら、そうゆうな。やっぱり帰って来たんだもの。はよ、仏間に寝かそ。
——何いってんだね、ばさま。
——ほんとだよ、こんげな男なんか。けだものだもの。

母シノのほか、だれもおれに、再起なんか望んではいない。

でも、まだまだ、死んで喜ばせる訳にはいかないのだ。

東京で、三吉サワ夫婦が待っている。

難波だって、「六甲の秋はなあ、えーでえ。ほんま、錦繡や。みんなで行きまほ。また、いっしょに飲みまほ」と楽しみにしている。

それに、まだ中国のどこかにいる田鶴さがしもあるではないか。

カラスが鳴き始めた。
姥が山の方だ。
明けるのか、暮れるのか——。
始まりか、終りか——。
どうも、そこいらがはっきりしない。
やたらに暗く、冷たい濃霧が吹きつけている。
もう雪も近い蒲原に舞いもどっているわけだが。
勘三郎も眠る、エノキの根元に横たわっているはずだが。
ひょっとしたら、今はサハリンと呼ばれる樺太の、原

生林をまださまよっているせいか。
露がまつ毛に結んで、ときどきほおに落ちる。
その切れ目に、うっすら何かが見える。
沖からコメのとぎじるをぶちまけてくるような、ニシンの群来の韃靼海峡か。
赤茶の平帯のようなコンブ林が、あやしくゆらめく能登呂の荒磯か。
大氷塊が居すわって老醜をさらす、オホーツクの海あきのようでもある。
それが動く。
北遠古丹うらの尾根で出合った、あの孤独のジャコシカらしい。
いや、何千、何万といる、海豹島のオットセイか、ロッペン鳥か。
いや、いや、やはり、そう多くはない。
犬橇を走らせるアイヌ人か。
山馴鹿狩りをしているオロッコ人か。
手を取り合って、国境を越えていった、あの男と女か。
行く手に何かがともっている。
内路浜の番屋の、ドラム罐ぶろの炎か。
奥内淵のタコ部屋の煙出しからよく見た、自由部屋のストーブの火か。
それとも、開北峠の駅亭の賭場を、じっと見ていた天井の大ランプか。
いや、みんな違う。
シノが手を合わせている、金ピカ仏壇のろうそくだ。
ゆれる炎が位牌の金文字を照らしている。
昭和十一年三月二十一日没。
俗名花場田次郎。
行年二十一歳。
たしかにそう読める。
もう一ぺんたしかめようと、背伸びした。
と、こっちが浮き上がり、風花のようにただよい出した。
少年時代によく見た、空飛ぶ夢だ。
とても軽快だ。
それだけに、また何かに追いつかれそうで、おちつけない。
漕げば漕ぐほどから回りするようで、あぶら汗が出る。
ゲンゴロウやアメンボのように、せわしない手つきでかき回し、やっと切り抜ける。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

イカ墨でもアイでもないにごりの底に、田んぼが、クワ畑が、森が、部落が、そしてくずれた土蔵さえ見えがくれする。
その間を大川がうねうねと続く。
道がいそいそと寄りそう。
鉦と太鼓をジャンドンボンと鳴らして、焼き場に向かう葬列がある。
祝言の舟がくる。
どう見ても蒲原だ。
白ミカゲは芝川の大橋だ。
たもとの藪に、首もげ地蔵が何体もころがっている。
大橋が御成婚記念に掛け替えられるさい、じゃまになって捨てられたしろものだが、その中に語らいの道陸神も混っている。
ひどい風化で宝冠も跡しかないものの、男神のほおと鼻をそぎ取ったひび割れは、荒くれ男の向かい傷そのものだ。
怒り肩で、サル面を空に向けている。頭上を越えようとする、おれに飛びかかるためだ。
が、それができない。有髪の女神のまたに差し入れた、片腕が抜けないためだ。
それだけではない。女神も男神のそこをつかんでいる。
目鼻はコケでふさがれながら、肉あつの口をあんぐりさせ、おくめんもなく歓喜を見せつけている。
「道陸神のばかーが」
昔から子供たちに、そうののしられるのもおかしくない。
田鶴たちだって、こそばゆい目くばせしてからそういって、キャアキャア逃げていったものだが。
おれもそれを、なれなれしく口にして、やっとのことで越える。
と、変なうなり声がする。
ふり向くと、男神がイヌのように女神を引きずっている。
いや、そうではない。酒乱の父伝市とシノとの、すさまじい語らいだ。
憎しみをヘドにして、吐きかけてやりたい。
が、なぜか、それができないから弱る。
そこを待っていたように、灰色のつむじ風が襲ってくる。
おれはめちゃくちゃに空をかきむしり、抜け出そうとあがく。
それでも、いよいよだめで、奈落に落ちていく。血の

気が引く。
「助けてくれ」
必死に叫び続ける。
それがしだいに自分にもこだまし、シノの声とかさなってくる。
「田ず郎」
ずっと下の方からだ。
ちぢこまった足が伸び、小鼻がうごめき、さわやかな大気が肺に流れこむ。
「田ず郎。はよ、まんま、食(け)えや」
のろのろ、シノがうながしている。
それで目ざめて、こっちの腹も鳴り、せき立てる。
いつもクズゴメとナッパの雑食(かてめし)だが、今日こそ早く台所に飛びこんで、鉄がまの底の方の、白米だけをえぐり取ってやれ。
そうつぶやいて、ぼろぶとんからはい出す。
いびつな敷き板がきしむ。これがエノキの三本またに巣くうおれの寝ぐらの、朝のあいさつだ。
このエノキは、こがらしが吹けば二百年のサメ膚をさらすが、ナの花と青田どきには金色の若芽若葉、初夏には黄の小花でそっとよそおう。いわば大年増の色け、やさしさがある。
おれは寄せ集めの油紙と荒むしろで、鬼門の北西から寝ぐらを包み、東南に小口を開けておいた。
冬遠くで見れば、雑なカラスの巣のようだった。
命づなを上下するおれの影は、止まればキツツキ、動けばオオグモに見えた。
伝市がこのエノキを酒代に替えなかったのは、買い手がつかないためだった。話があっても、堅木のケヤキなどと違い、それこそ二束三文(にそくさんもん)の薪でしかない。
それがおれに幸いした。
目をつぶっていても、おれがまるで三本またに鎮座する山の神のように、村のすべてを色で、音で、においで知らせてくれる。
田植え休みの、茂助どんの庭のシャモばくち——。
長雨には地蔵堂にこもる女乞食に、こっそり酒持ちでかよう八重じんじ——。
盆と正月に東京からもどる良二を前に、アサ後家とヨネ子の、さかりネコのような恋争い——。
金色の日が沈む秋の浜べのグミ原まで、演習に来ている芝町連隊の馬のいななきと、中隊ごとの往復ビンタ——。
寒行(かんぎょう)で吹雪の夜道をいく、てななし子尼さんのソプラノと鈴の音——。

満月には裸になって、雪原の田んぼとクワ畑にさまようヒス玉子と、その後を追うむとの千次――。
雪どけにはシベリヤに帰るガン、オオハクチョウのクワークワー鳴き――。
そんな移り変りの中で、一番仕合わせの時は、山バトやカッコーがこの寝ぐらの上で鳴き、ニセアカシヤの甘ったるい花の香が風に乗ってくる初夏。
そして、天も地も、うれ切った稲穂の香でいっぱいの晩秋だった。
いつまでもまどろみ、とろけていた。

## 秘仏

その朝おれの空飛ぶ夢をめちゃくちゃにした、つむじ風の正体は農民組合のホラ貝だった。
鎮守様に野良着の男女を集めて、気勢をあげようというわけだ。
そのうちに、半鐘が早鐘で鳴り出した。
国道部落の火の見やぐらだ。
芝町区裁判所の執達吏一行が、そこから乗りこんで来たのだ。
いよいよ小作料未納者の田んぼ差し押えだ。
組合幹部たちは演説を中止し、先頭になって、境内から駆け出していく。
手ぬぐいでほおかぶりした、新聞記者もまぎれこんでいるはずだ。
で、あくる朝の新聞はまた、執達吏護衛の警官隊と野良着ぜいの「水を張った田んぼの泥合戦、組合幹部ごっそり逮捕で幕」といった記事で一面を埋めるだろう。
朝めしがすむとおれは、シノがくくりつけた妹の一人

を背おい、そっちの野良から回って見た。

> 裁判所の判決により、返還執行命令ありたれば、五月五日より、耕作その他のための立ち入りを禁止する。
>
> 地主　八鹿真太郎

どの部落の田んぼにも、この四角の立て札がしらじらと影を落としている。

その途ちゅうで仲間たちに会い、九作の庭にはいった。

ここは留守幹部が部落ごとに開いた演説会場の一つで、講師は東京からついたばかりの応援弁士たちだ。

「戦えば必らず勝つ。どこまでも戦え。片川鉄」

「女の一心で、田んぼを取り返せ。宮家正二」

「死んでも、敵の甘言に乗るな。滝川平次」

「農民を見たら、どろぼうか。山沢信太」

「こんなにばかにされて、だれが国を思うか。大矢一壮」

こんなふんどしビラが、雨戸にべたべた張られている。

庭の荒むしろ席は、肉親を警官に引っぱられていった家の、女と子供たちで満員だ。

顔色とあべこべの白い胸丸出しで、子にしゃぶらせる女が多い。

おれの背で泣きわめく妹も、隣りの嫁の片一方の大乳ぶさを押しつけられて、あっさりのどを鳴らした。

見回りに来た村の巡査がまずせきばらいして、サーベルをがちゃつかせたものの、満開の八重桜ばかり見上げている。

どうも、ばつが悪そうだ。

それに対して、弁士たちは若者ぞろい。もう真打ちの講釈師か、一流の易者のようにぶちまくる。

その口の両はじにカニのような泡をため、つばを飛ばし、貧相な若はげさえ精力的なレーニンぱげに見せている。

数年にわたるこの争議で、色変りのこんな男女がおおぜいやって来た。

農民学校の神田先生も、その中の一人だった。

組合が農民学校を作った切っ掛けは、おれたち組合がわ生徒を遠足に連れ出した、青年部員が警察に引っぱられたことだった。

人けのない砂丘部落を越え、キジバトがのどを鳴らす

松林とニセアカシヤ林をくぐり抜け、ヒバリが舞い上がるグミ原をかきわけていった。
その向うに白い白い砂浜と青い青い海原があって、気も遠くなるような沖合いの、地引き網の浮標にカモメが群れている。
波打ちぎわをチドリが小まめに走っている。
漁師たちが綱巻き器の棒につかまって、ぐるぐる回っている。
そこまで、おれたちも我勝ちに走っていって腰をおろす。
と同時に、みんな腰にゆわえてきたふろしき包みの、自分の頭大の握りめしにかぶりついた。
それを止めさせるように、警官五人が番屋から出て来た。
「何すに来たっ」
青年部員が立ちあがって、握りめしを振り上げた。
「おめえらを検束する」
指揮官はいたけだかだ。
「何でだ。理由をいえや」
進み出たのは、東京の町工場で仲間とストライキをたくらみ、首になって来た若者だ。
「理由だと。ばかどもが。義務教育の高等小学校をすっぽかさせて。こうして、村の生徒の半分もだ」
「何、寝ぼけたことを。本日の同盟休校は、昨日組合から校長に予告ずみだぞ。その理由も、ちゃんと書いて」
「こっちは聞いてねっ。そんな御託は、本署でいえ」
これだけのやりとりで、引率の青年部員三人が連行されてしまった。
「えーか、おめえら。めしくったら、はよ家にけえれ。そして、あしたっから、ちゃんと学校へ行くんだぞ。先生がたも待っていなさっから。えーな。けっして、あんな不良どもに従うでねえぞっ」
年輩の巡査がそういい残した。
おんぶっ子の多い女生徒は、ひとりが泣くと、みんな泣き出した。
こうして、村まで泣き声だらけの、ばらばらな列が続くことになった。
組合が怒って、子供はもう学校へやらぬ、事務所と部落の寺などを臨時の農民学校に当てると決めた。
教室は土間と庭、机は荒むしろの上のソーメン箱やナシ箱だった。
同志と名のる変な人たちが、先生を志願して来た。
角帽の東京の大学生、カンカン帽で関西弁の男、断髪にベレー帽の女子大生、鳥打ち帽にナッパ服の職工、フ

ケだらけの長髪のルパシカ男、げたばきのストライキくずれ、ネクタイがいつも黒の助教員、とさまざまで、あげたら切りがない。

その申し合わせは大まかで、「子供の自由と個性を尊重し、能力を助長しよう」の一か条だけだった。

時間割りは親方日の丸的な強制、しつけは奴隷制度の遺物として否定され、自由放任主義が採用された。

おれたち生徒の出欠は取られなかった。どんな悪さをしても、とがめなかった。いつでも横になれたし、外にも出られた。授業ちゅうに生徒が一人でもうっかり笑えば、みんな関心ありと見て何時間も続けた。

おれの分校は無住寺のお堂だった。

昔から絶好の子守り場だが、こんどは組合が出すおやつのもらい場でもあった。

乾パン、せんべい、おこし、だんご、と日によって変るが、どれにも田んぼを取りあげた地主たちの似顔が焼き付けられ、「八鹿パン」「栗原 せんべ」「大山 おこし」「佐太郎巻き」などと呼ばれていた。

女宗五郎たちが東京や大阪で、闘争報告をぶってから売りつける「恨みのマッチ」と同じ行商品でもある。

「どうだ、今日の味は」

度のきついめがね、きゅうくつな学生服の神田先生がおれたちに聞いた。

「ううーん」

何人かが顔を横に振った。

「なーるほど、まずい。もう少し、ましな物作らんかい」

自分も味見してから、女宗五郎たちにずけずけいった。

「金も出さねえで、うるせえ先生だねす」

女宗五郎たちがそっぽを向いた。

でも、この人こそ一番人気の先生だった。

見回りの警官に「ここは林間学校で、臨官学校じゃありませんよ」と笑ってからかい、「なんじの敵を愛せよ」とつぶやきながら、胸に十字を切って、お茶とおやつを出してやった。

ある日、この神田先生がおれたちに、「これから敵の本城八鹿邸に乗りこむ」といい出し、「もしもし亀よ亀さんよ、の替え歌が手みやげだから、歌ってついて来てくれよ」と頼んだ。

初めはみんなこわがって、黙っていた。

が、神田先生が「八鹿真太郎のせがれ東一郎は、高校時代に寮が同室の仲間だ。そいつが訪ねてこいといって



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com